

教職課程センターだより 第33号

発行日 2025年3月21日

巻頭言

教師を目指すあなたへ

教職課程センター副センター長 橋本洋治

最近、教育実習を次年度に控えたある学生さんから「自分は教師に向いていないのではないかな？」という相談を受けました。この種の悩みは、決して珍しいものではありません。多くの先輩たちも大なり小なりもっていたことです。それだけ真面目に自分の将来のことを考えているということでしょう。ただ、この悩みの活路を見出すには頭の中で考えるだけでは不十分です。大切なのは、悩みつつも今の自分が置かれた状況の中で、できることにしっかり取り組むことです。

人間は経験を通して自分自身を知っていきます。今の段階で「教師に向いているのか」と考えても、本当の答えは見えてきません。教職課程で学ぶこと、その中で教育実習に挑戦すること、また大学内外での様々な活動に参加すること、そうした実践の中でこそ、本当の自分がはっきりしてくるのです。だから、「まだ確信が・・・」と思っている方こそ、目の前の学びにしっかりと向き合ってみてください。授業での学びをさらに自分なりに考え、子どもや大人と関わる機会を積極的につくり、子ども、学校、教育について仲間と語り合う。そうした日々の積み重ねが、あなた自身の本当の気持ちを引き出してくれるはずです。

決して、迷うことが悪いと言っているわけではありません。むしろ、迷いながら努力する中で、人間は成長します。大切なのは、迷いを前向きな行動につなげること。「悩んでいるから動けない」ではなく、「悩んでいるからこそ、まずはやってみる」。そう考えて、目の前の学びに全力で取り組んでみてください。その結果、教師が「やっぱり合わない」と感じたなら、それも一つの大切な発見です。逆に「やっぱり子どもたちと関わる仕事がしたい」と思えたなら、それは確信に変わるでしょう。どちらにしても、今の経験は決して無駄にはなりません。

しんどい時には、家族や仲間、大学の教員の助けを借りましょう。周囲の人と悩みを共有することで、気づきや勇気生まれることもあります。どんな道を選ぶとしても、今ここでの学びが、あなたの未来につながるのです。支えてくれる人たちと共に、自分のペースで前へ進んでください。あなたの挑戦を応援しています。





面接対策講座に参加して

教育・心理学部 子ども発達学科 学校教育専修3年 手嶋千遥

参加した動機

私が教員採用試験対策講座に参加しようと思った動機は、教員採用試験に向けて、現時点でどのようなことを行っていくべきなのか分からないと感じていたからです。特に面接対策については、自分自身だけで進めていくことは難しいのではないかと感じていたため、面接に向けた対策方法を学びたいと考え、この講座に参加することを決めました。

参加して学んだこと

私がこの講座に参加して最も学ぶことができたと感じたことは、面接で話す際に、具体例やエピソードを入れて話すことが大切だということを知ることができたことです。今回の講座では、大学の先生に面接官になっていただき、事前に指定された、特別支援学校教員の志望理由、理想の教師像、自己PRの三つの質問に答えるということを行いました。

まず、面接練習に入る前に、この三つの質問について自分の考えを書き出すことから行いました。次に、書き出したことを参考にしながら、面接のような形式で実際に質問に答える練習を行い、その後、発言の内容や話し方についての指導をしていただきました。このような流れで面接練習を行ったことから、事前に質問の答えを考える際に、文章で考えるのではなく、自分の話したいことを部分的に考えておくほうが良いということを感じました。

私は、自分の考えを書き出した際、文章で考えて書き出していました。そして、面接練習で答える際に考えた文章を一言一句話そうとしてしまい、考えた文章が思い出せず、言葉に詰まってしまうということがありました。そのため、事前に答えを考えるときは、話したい内容をキーワードなどで部分的に考えておくほうが、話す時に言葉に詰まることが少なくなるのではないかと考えました。そして、発言の内容について先生に指導していただいたことから、最初にも述べたように、具体例やエピソードを入れて話すことが大切だということを感じました。

私は質問に答える際、過去の出来事などを取り上げながら答えました。しかし、どの質問の答えも抽象的になってしまい、具体性がありませんでした。そのことについて、大学の先生に、面接官のイメージが浮かびやすいように、具体例を入れたり、特徴的なエピソードを入れたりすると良いということを知ることができました。自分の考えをまとめていた時は、質問の答えに具体性がないということに気づいていなかったため、具体例やエピソードを入れて話すことを心掛けるべきであると知ることができたのは、この講座に参加した大きな価値であると感じています。

今後の教採対策

今回の講座に参加したことを通して、具体例やエピソードを入れながら自分の考えを話すことができるように、これまでの印象的な出来事などを意識しながら、面接ノートに考えをまとめていきたいと考えました。そして、面接以外にも、一次試験の勉強や、小論文、場面指導などの対策も行っていかなければならないと思うので、友人と一緒に勉強したり、大学の対策講座に参加したりしながら、試験に向けて努力していきたいと思っています。





教員採用試験合格体験報告会に参加して

教育・心理学部 子ども発達学科 学校教育専修4年 中橋明日海

1. なぜ報告会に参加しようと思ったのか

私は教員採用試験や今後に向け、自分がしなくてはいけないことはわかっている、そのためにどう動けばよいのかが明確でなかったため、直近で合格された先輩方の話や思いを直接的に聞くことが可能なこの報告会に参加することを決めました。

2. 報告会で学んだことや感じたこと

私は、この報告会で学んだことは大きく分けて2つありました。1つは大学のサポート体制についてです。本学はキャリア開発課や学修アドバイザー、教職課程センター等で教採のためのサポート体制が整っていることや複数の学習スペースがあることを知る機会にもなりました。また、学習スペースについては、以前から知っていましたが、先輩方の話の中でこの学習スペースは学習環境が整っているだけでなく、一緒に勉強している学生を見たり協力し合ったりすることができることも分かりました。それは、頑張っているのは自分だけでないことを感じられ、教採に向けたモチベーション維持や質問し合ったり教え合ったりすることでレベルアップにも繋がることを知ることができました。

もう1つは、合格された先輩方の話や思いを知ることができたことです。先輩方の思いを知ることが、同じ道を歩んでいく私たちにとってとても必要なことではないかと感じました。ただ、合格するための勉強法を知るだけでなく、どんな想いで臨んだのか、これから受験する私たちに向けて話してくれた言葉、失敗したことや後悔したことなど沢山のお話を聞くことができました。

私たちは教採に合格するために勉強をしています、それはその先の教員生活をよりよくしていくための通過点であり、越えなければならない第一の壁であることにも気付かされました。そして、何のために4年間学んできたのか、何のためにどう頑張るのかを自分の中で整理し、意識を高めるよい機会であると感じました。

3. これからの実習や教採に向けて

私は、3年生の後期に行った小学校実習を通して、大学で学習してきたことはあくまでも基本に過ぎず、実際の学校現場ではその基本を臨機応変に変化させ、その時々で児童に合わせた教育をできる力が必要であることを痛感しました。また、その経験は自分を成長させてくれ、その中で自分にできることを見つけ、自分の教員としての形を見つけていくよい機会となりました。そのため、4年時に行う中学校実習では教員が生徒にできることは何かを考え、求められることに対して自分がどうしなければいけなくて、自分はどうありたいのかを見つけながら行っていきたいです。教採に向けては、どの先輩や先生も何事も早いのに越したことはないとおっしゃられているように、自分のためにできる最大限を毎日コツコツと励んでいきたいです。

4. どんな教員になりたいのか

私は、児童・生徒の目線に立ち、寄り添うことのできる教員になりたいと考えています。先生という立場にありますが、あくまでも同じ人間であるため、自分にできることは限られていると思います。そんな中で、これから出会う児童・生徒に真摯に向き合っていくことで、信頼したい、この先生と出会ってよかったと思ってもらえるような教員になりたいと思います。

教員採用試験合格体験報告会に参加して

スポーツ科学部 スポーツ科学科3年 服部温仁

・教員採用試験合格体験記に参加したきっかけ

私が教員採用試験報告会に参加したきっかけは、合格した先輩方がどのような勉強をし、どのように対策してきたのかを知り、参考にしたいと思ったからです。インターネットや資料から得られる情報では、具体的な対策方法や教員採用試験のイメージがなかなか湧かず何からやるべきか分からなくなっていました。だからこそ、教員採用試験に対する不安をなくし、試験対策の見通しを持つためにも実際に先輩方から話を聞き自分のモチベーションにも繋げていきたいと思い参加しました。

・参加して感じたこと

実際の報告会では、教育・心理学部、スポーツ科学部、経済学部、国際学部の先輩4名からお話を聞くことができました。報告の内容としては、「教師を目指した理由」「その自治体を受けようと思ったきっかけ」「試験対策の仕方」などでした。様々な学部学科の先輩方から話を聞くことで、自分に合った勉強法を見つけることができるだけでなく、教員採用試験までの見通しをイメージすることができました。また、実際に使っていた問題集や資料なども具体的に教えてくださるため、とても参考になる内容だと感じました。

今回報告会に参加をして、近年の教員採用試験は人物重視の自治体がほとんどで、筆記試験の勉強も大切だが、面接対策がとくに重要だと感じました。面接は、自分の事を全く知らない面接官に対して、「自分にはこんな魅力がある」ということを伝える必要があるため、日頃からボランティア活動などに参加をして自分にしかない強みを見つけ、磨いていく必要があると知りました。だからこそ、今のうちから色々な経験をし、自分の強みを見つけて、磨いていくとともに、自分の気持ちや考えを相手に伝える練習を日頃からしていきたいと思うきっかけになりました。さらに、報告会に参加をすると「合格体験報告の冊子」が貰え、そこには試験内容や心境などネットで調べても出てこない情報（実際に出了模擬授業や場面指導の内容）についてもとても詳しく書かれているので、本当に教師を目指している人なら絶対に参加するべきだと思います。

・教採に向けて

報告会に参加をして、教員採用試験は早めの対策が合格に繋がると感じたため、今自分がすべきことを考えて1日1日を大切にしていきたいと思います。また、教員採用試験で悔いが残らないように自分の人間性を磨きながら最後まで対策を諦めずに行い、頑張っていきたいと思います。





合格体験記（福井県/島根県・小学校）

教育・心理学部 子ども発達学科 学校教育専修4年 川端理人

教採勉強スタート

受験勉強を始めたのは大学3年生の10月ごろ。まずは自治体の出題傾向の分析を行った。過去問の巻末などに出題分野が載っているので一度はきちんと見て出題傾向をつかむことをお勧めする。分析したのちに過去問を解いていった。勉強において大切なのは復習なので、新しい範囲3割、過去の範囲7割で勉強時間を分割した。毎日コツコツ勉強する習慣をつけることが大切なので勉強があまりできない日だとしても30分は時間を作って勉強した。年末ごろに過去問をすべて解き終えたので東京アカデミーの問題集を解いていった。出題傾向の分析であまり出題されない分野だからといって勉強しなくていいわけではないので、問題集で一通り押さえることをお勧めする。モチベーション維持の方法は、自分の場合週一くらいで自分の趣味を満喫する時間を用意することでリフレッシュしていた。スランプに関して、自分は一度コロナに感染し勉強が全くできないときに勉強に対するモチベーションがなくなってしまったことがある。このままではいけないと思い自分は小学校にボランティアをしに行った。子どもとふれあうことで自分が教師を目指すきっかけになった「子どもが好き」という感情を呼び起こすためである。結果自分を奮い立たせることができたので、常日頃から子どもと関わっておくことをお勧めする。面接、小論文対策は1、2月ごろから始めた。とにかく自己分析が重要であると考え、自分がどのような人間なのか、なぜ教師という道を選択したのかを日々考えるようにした。他にも教師になったときに強みにできることを鍛えておくことも重要であると考えた。自分の場合はピアノを強みにしたいと考えたので教採の勉強と並行して練習に励んだ。面接練習はとにかく多くの人と練習することが重要である。例えば「教員はブラックだと言われるが、このことについてあなたはどのように思われていますか？」というテーマに対して数人で議論すると、多くの人の意見を吸収できるし、自分の考えが綺麗にまとまってくる。極力自分で何とかするのではなく協力して教採に臨んでほしい。

受験して思ったこと

教採を受けてわかったことは、時間は有限であるということである。自分が教採の勉強を始めて最初感じたことは「時間が無い！」である。膨大にある覚えることを眺めていると必ずこの感情になると思う。焦りや不安に苛まれてしまい自分を追い込んでしまうかもしれないが、一度落ち着いてほしい。教採を受ける人は皆同じように教採の勉強や大学の講義、バイトにボランティアなど様々なやるべきことを抱えている。自分だけが追い込まれているわけではない。一分一秒を大切に意識をもって毎日コツコツ自分を信じて進んでいけば必ず成功するはずである。ぜひ未来の子どもたちのために頑張してほしい。



合格体験記（東京都・特別支援学校〈中高社会〉）

経済学部 経済学科4年 奥田凜香

私は今夏に愛知県、長野県、東京都の3つの自治体を受験し、その中で東京都から合格を頂くことができました。なお東京都は、2023年度受験から各校種・教科から特別支援学校への併願が可能となっていて、私は今回の受験で特別支援学校【中高社会】にご縁がありました。そのため、後述する二次試験対策等は若干変則的な動きが見られますが、皆様の今後に役立ちますと幸いです。

① 受験対策・勉強法について

教授対策を本格的に始めたのは3年生の1月半ばからになります。それまではCDP講座の受講をはじめ、購入したテキストを読み進める、余裕があれば過去問に触れてみる等を中心に動いていました。

開始からまず打ち込んだことは一次試験対策で、中でも力を入れたことは過去問分析やテキストを使った問題演習になります。過去問分析には、協同出版から出ている自治体ごとの過去問シリーズ(例、「2025年度版 長野県の社会科 過去問」など)を活用しました。自治体ごとの過去問シリーズは、解説が載っているだけでなく、あらかじめ傾向が表にまとめられているので、私はそれを見て出題傾向に優先順位をつけて勉強していました。問題演習に使用したテキストは教職・一般教養対策であれば「一般教養の演習問題(時事通信社)」、「教職教養の演習問題(時事通信社)」、「全国まるごと過去問題集 教職教養(協同出版)」を主に使用し、専門科目に関しては「中高社会 らくらくマスター(実務教育出版)」、「全国まるごと過去問題集 社会科(協同出版)」+α高校受験対策や大学受験対策の参考書を使用しました。一次試験対策はとにかく志望自治体の過去問分析をして、頻出だった問題を解けるようにしておくことが突破への近道になると思います。特に専門科目に関しては範囲が膨大かつ、一定以上のレベルが求められる試験内容になるため、その範囲を満遍なく網羅することは極めて難しいと言えます。私も中々できませんでしたが、出るか怪しい問題の対策に時間を浪費するぐらいなら捨てる内容は早々にばっさりと捨てる選択をした方が良いです。また、過去問分析は併願先自治体の選択にも役立つと感じます。例えば、第一志望が長野県だとすると、教職教養では教育法規(教基法・学校法、地公法・教特法など)が重視されている傾向にあるため、同じく教育法規の出題が比較的に多い東京都を併願先に選ぶ等、数多い選択肢を絞るためにも早々の分析と対策が必要になると思います。論作文については、模試で添削指導を受けたり、過去問の模範解答を真似して書いたりすることで対策をしていました。

二次試験について、私は東京都のみ受験のためそれを軸に述べていきます。まずは春期に開かれる面接対策講座などを積極的に受講し、基礎的な考え方を養うことをおすすめします。対策開始時は一次試験突破が当面の目標になってしまいがちですが、一次試験合格後から二次試験までは数週間しか猶予がない場合がほとんどです。教授の面接は一般の面接とは異なり、教員としての適性或専門性、子どもたちに対するまなざしなど独自の内容を自分の言葉で表現しなければならず、これはどの教科・校種であっても同じだと思います。私自身、講座受講時こそ特別支援学校は想定していませんでしたが、一次試験を特別支援学校中高社会で合格を頂き、二次試験に臨まなければならないといった時には、面接講座の中で積み重ねてきた自身の教員としての軸を生かしながら対策に打ち込むことができました。他方で、1つ注意点をあげるとすれば、併願第2志望という部分は面接においてほぼ考慮されないと思っておいください。

ただ、基礎の部分が醸成できていたとしても、面接では教育時事や各自治体の教育的特色や取り組み(実際に私が受けた面接では、東京都教育委員会が定める「教職員の服務に関するガイドライン」から質問が出されました)について聞かれるため、対策は早めにやるに越したことはないと思います。自治体によりけりですが、東京都は面接シート(志望理由やガクチカ、教科専門性など分野ごとに記載項目アリ)というものがありました。模擬面接や面接シートの作成では、これまで貯めてきた見方や考え方をメモした面接ノートを活用したほか、頼れる大学の先生に見てもらいながら進めていき、ほぼ二人三脚の状態でご指導をいただきました。昨今はYouTubeなどにも教授対策の動画があるため、それらを活用し、自分のできる精一杯に取り組むことは勿論ですが、大学の先生など頼れる人にはとことん頼ることは最も

大切だと思います。私は先述の模擬面接などの他にも、1対1の面談の機会を作っていただき、専門ではない特別支援学校の採用試験対策のノウハウを伝授いただきました。

教採対策は険しい道のりのため、心が折れかけてしまうことが多くありました。私はそんな時、自身がなぜ教員になりたいと思ったのかという原点に立ち返ったり、教育実習での思い出を振り返ったりすることでモチベーションを保っていました。また、教職課程センターにて、同じ夢を志す友人と共に勉強したり、話をしたりすることは私にとって非常に励みになった貴重な時間だったと振り返ります。

② 実際に受験してみて気づいたこと・伝えたいこと

昨今教員採用試験の倍率は下がってきていますが、実際に受験をしてみるとまだまだ狭き門だと言えます。前述にて過去問分析がとにかく大切だと述べましたが、傾向と対策がばっちりできていたとしても、本番は緊張や他の受験者がいるプレッシャーもあるため、いつも通りの力が出せるとは限りません。そのため、胡坐をかかずに普段から後悔しない選択を積み重ねてください。良い選択、悪い選択は明確にありませんが、自分がやってきたことに自信を持つことができれば、自ずと未来への道は拓かれるはずです。

長くなりましたが、これから教員採用試験に臨む皆様が良い結果を得られることを願っています。応援しています！





合格体験記 (東京都・中学校<保健体育>)

スポーツ科学部 スポーツ科学科 4 年 鎌瀬柚綺

1. 受験対策について

【1 次試験の勉強方法】

教員採用試験の 1 次試験の勉強は、3 年生の後期に入ってから始めました。主に、「全国まるごと過去問」や「共同出版」の自治体別の過去問を解いて勉強しました。勉強を始めたころは、「とりあえず解いてみよう！」くらいの気持ちで解いて、もちろん最初は何も分からないのでノートは真っ赤になりました。ですが、全国まるごとの良いところは、全国の自治体の過去問が集まっているので問題の形式は少し違いますが同じような問題が何回も出てきます。そのおかげで、出やすい問題が分かり自然と覚えていきました。私は、勉強が得意ではないので長時間の勉強や毎日勉強するのというよりは、受験する自治体の問題傾向を過去問から読み取り、効率よく勉強することを心掛けました。

【2 次試験の対策】

2 次試験は、個人面接が 40 分と実技試験が 4 種目ありました。私の場合、大学が開く面接講座に毎回参加して少しずつ面接でどのようなことを聞かれるか把握するようにしていました。1 次試験の合格通知が来てから、指定の面接シートを作成し、大学の先生や面接試験がある友達と一緒に zoom でたくさん練習をしたことで、最初は何を答えたらいいのか分からないところから、すらすら自分の考えを話せるようになりました。面接練習は、対策講座で何回も心が折れかけて、自分も先輩のように話せるようになるのかとても不安でしたが、とにかく何回も練習をして回数を重ねることが大切だと感じました。実技試験については種目が決められていたため、大学の施設を借りて先生や友達に教えてもらいながら自分の納得のいくまでひたすら練習をしました。

2. 後輩へのメッセージ

教採を経験して、大切な事を学びました。それは、「最後まで諦めないこと」です。そして、一緒に教員を目指す仲間と協力して、「団体戦」で挑むことが大切だと感じました。私が、最後まで諦めずに頑張れた理由には、もちろん合格したい気持ちや教員になりたい気持ちもありますが、何より周りの仲間と励まし合いながら教採対策に取り組めたことがモチベーションを維持できた理由の 1 つです。どうしても、1 人で勉強しているとさぼったりしてしまうのは仕方ないですが、同じ方向を向いて頑張っている仲間と一緒に勉強をすることで自然と勉強のスイッチが入ります。なので、周りを巻き込んで団体戦で教員採用試験に挑んでください。時には、リフレッシュをすることも忘れずに自分のペースで頑張ってください。皆さんの合格を心から願っています！





合格体験記（東京都・特別支援学校〈保健体育〉）

スポーツ科学部 スポーツ科学科 4年 山田葵

① 受験対策・勉強法について

受験勉強は、大学3年生の5月頃から少しずつ始めていましたが、現実味がなく、本格的に勉強を開始したのは3月に入ってからでした。が、教育実習があった5月の下旬から6月の中旬にかけては勉強を行うことができませんでした。私は陸上競技部に所属していて、週6～7日で部活動があり朝練も午後練もあったため、部活動と勉強の両立は大変でした。その中でも時間を見つけ、リフレッシュをする時間も大切に、メリハリをつけて勉強することによって、効率よく勉強を行うことができたと思います。また周りの友達もたくさん勉強している中で、点数が伸びずに苦しみや焦りもありましたが、最後まで粘り強く頑張るということをモットーにしていきました。1次試験では、筆記（教職教養＋専門教養）と小論文であったため、一緒に東京都を受験した友達と過去問を見て、傾向を掴み、基本的には参考書を使い、書くというよりも、赤シートで隠し、読みながら勉強を行うことのほうが多かったです。教職教養に関しては、全国丸ごと問題集も使用しました。

小論文に関しては、本やネットで小論文の書き方を学び、過去問を何度も書いて先生に添削していただきました。また、出題傾向が毎年似ており、ネットに約5年間分の例題や回答が載っていたため、そちらも参考にしました。

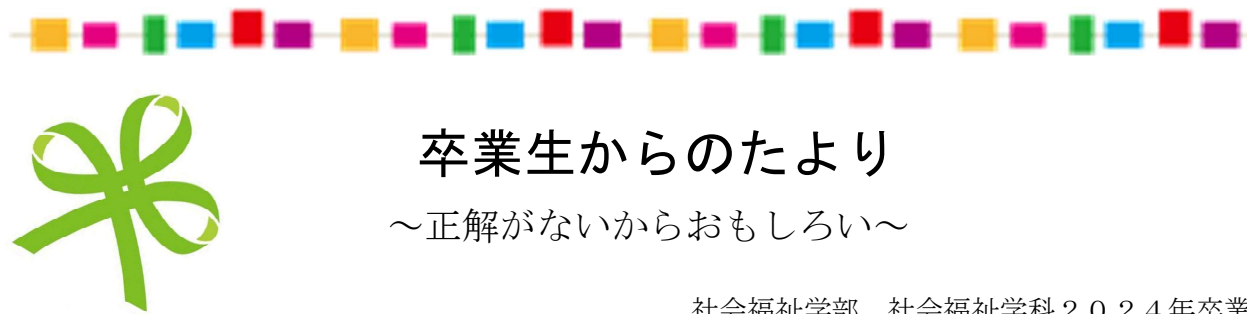
実技は2次試験でしたが、前もって種目と技が公開されており、1次合格から2次までの時間が短かったため、各種目の先生方に指導のお願いをし、5月頃から実技の練習も並行して行いました。

面接も2次試験で実施され、1次試験合格後に面接票が送られてきました。そのため、それ以前に関しては、教職課程センターで開催されていた面接練習に参加をし、どのように面接を行っていったら良いのかについて学びました。面接シートが届いてからは、面接シートを書き進めるとともに、どんなことを問われても答えるよう、自分の中の軸を決め整理していくことや口頭式の場合指導だったためどのように対応していくかなどの知識を増やして行きました。また部活動の合宿と面接の曜日が重なってしまい、時間を見つけながら、先生や友達とzoomを繋げて面接シートを完成させ、面接練習を行っていました。友達と一緒にすることによって、私と違った視点で回答を得ることができるため、どんな質問にも答えられるようになりました。

② 後輩に伝えておきたいこと

1人で抱え込み解決するのではなく、周りの先生や友達を頼ることも大切だと思います。私自身、沢山の先生方と友達に支えてもらいながら乗り越えることができました。受験勉強は、常に不安や焦りがあると思いますが、自分を信じて最後まで粘り強く頑張ってください。





卒業生からのたより

～正解がないからおもしろい～

社会福祉学部 社会福祉学科 2024年卒業
愛知県高校教諭 新美友梨

1. はじめに

私は昨年日本福祉大学社会福祉学部を卒業し、現在は愛知県内の高校で勤務しています。約1年働いてみて感じたことは、人を相手にする仕事の難しさと楽しさです。教員は人を相手にする仕事ですから、この通りやれば大丈夫というマニュアルはありませんし、そもそも正解はないのだと思います。その分悩み、苦しむことも多いですが、生徒が良い方向へ向かった時には大きな嬉しさややりがいを感じます。教員としてまだまだ未熟者ですが、私の経験が在校生のみなさんの参考になれば幸いです。

2. 教員としての日々

私の配属された高校は、全校生徒130人ほどの小さな高校です。福祉科教員は私1人しかおらず、何をすればよいかわからないまま科主任となり、実習先との打ち合わせや講演会の依頼、会議の出席、資格申請、その他書類作成に加えて分掌の仕事など、目が回るほど忙しい日々を過ごしました。教員の仕事は授業づくりだけではないと分かっていたのですが、実際に教員になってみると、その仕事量に改めて驚きました。自分にはもうできない…と涙目になることも何度かありましたが、常に気にかけて下さる先輩の先生や同期のおかげで何とかここまでやっていくことができました。人のあたたかさ・優しさを常を感じながら働くことができています。

3. 大切にしていること

私が大切にしていることは、「教員である前に支援者であるべき」ということです。これは、研修で他校の福祉科の先生に教えていただいた言葉です。はじめは、教育学部を卒業している先生なら当たり前知っているだろう指導案の書き方や成績のつけ方が全く分からず、焦りや負い目を感じていました。しかし、「あなたは福祉科の教員なのだから、ふくしの視点をもって生徒と同じ目線になり、生徒と一緒に悩み、答えを探していきなさい。」と教えていただいたことを機に、私は私らしく、日本福祉大学で学んできたことを活かして仕事をしたいと思うことができました。

日本福祉大学の教職課程では、教科の内容をどのように教えるかということよりも、生徒とどのように関わっていくか、何を考えさせたいかについて学び、考えることが多かったように感じます。先にも述べた通り、正解はないからこそ、大学時代に繰り返してきた、「考える」ということの重要性を強く感じていますし、日福で学んでよかったと思うことの一つでもあります。

最後に、教員の言動は生徒の考え方や人生に良くも悪くも大きな影響を与えます。私の言動が生徒にどのように捉えられているのか、責任を感じ、時には怖くなることもあります。しかし、この責任や怖さは、教員として常に持ち続けていかなければならないものだと思います。教員は決して楽な仕事ではありませんが、魅力あふれる仕事です。大学での学びが直接教員という仕事には繋がらなくても、必ず何かのヒントになったり引き出しになったりしているはずです。意味があるかどうかは、その時の自分が決めるものではなく、何年か後に分かるものなのだと思います。ぜひ、日本福祉大学で学んでいることを誇りに、何事も前向きに取り組んでみてください。応援しています。



卒業生からのたより

スポーツ科学部 スポーツ科学科 2024 年卒業

愛知県特別支援学校教諭 川本愛華

●魅力とやりがいで溢れた社会人

現在は、愛知県の特別支援学校で教員として働いています。私は、高校時代の恩師の影響を受けて学生時代、子どもと共に成長することができる「共育」を実現する「教員になりたい」という思いで特別支援学校の教員を目指しました。その思いは教員になった今でも大切にしています。

高校時代から憧れてきた「教員」という夢を教員採用試験に合格し、叶えた現在は、自分が想像していた以上に「働く」ことは簡単なことではないと分かりました。

まず「学生」と「社会人」のギャップを感じました。社会人1年目、4月の会議では馴染みのない専門用語が飛び交い、内容をほとんど理解することができませんでした。これからやっていけるのかどうか不安を抱え、一年がスタートし、時には「できないかもしれない」と思うような壁がいくつも訪れてきました。ただ、周りには支えてくれる人が沢山いて、迷惑をかけることはいっぱいですが、色々な方にお世話になりながら、数年後には「私も〇〇みたいになれるのかな」と思い、一つ一つ積み重ねていく大切さを感じました。そしてどの仕事をしていく上でも重要視されていますが、特に教員をする中で「コミュニケーションの大切さ」を実感し、ポジティブ・リフレーミングの力を身につけることで、子どもたちの成長をより感じることができると思いました。常に不安や戸惑いはありましたが、子どもと関わることが好きなので、毎日がとても楽しく、気づけば1年間があっという間に過ぎていきました。

教員になって、学校で過ごす毎日の中で学び続けることの大切さを痛感しました。授業を「受ける側」から「する側」になって感じたことは当然のことですが、知識や技能、子どもを預かる責任感などと共に、「話し方」の重要性を感じました。声のトーンや強弱、展開などを組み立て、その中で「自分らしさ」とは何だろうと考えることも多くありました。また、常に自己分析を行い、自分の得意不得意を見つけながら、熱い情熱や子どもへの愛をもって働くことが重要な仕事であると感じています。そして「なぜ？」と疑問に思ったことをすぐに考え、その答えを探すことが勉強であるのではないかと感じています。そこから見つけた課題は自分を強くしてくれる種であり、未知である何かを追い求めていくことで、自分自身を磨き成長して芽が出ていくと感じているので、学び続けられる人でありたいと思っています。1年目は苦労の連続でしたが、それが今後大きな糧になると感じた一年間でした。

●メッセージ

皆さんは今、夢や目標がありますか。

教員という仕事に就き私が感じていることは、子どもたちと過ごす日常に何気なく「笑える」機会が多くある幸せな仕事であるということです。周りには絶対に支えてくれる人がたくさんいるので、助けを求めていくことができるようになり、自分の好きなこと、自分にとっての生きがいを見つけて取り組むことだと思います。学生時代は、たくさんの楽しみをみつけ「自分らしい『笑い』の宝探し」の経験をしてください。

教員を目指している方は、試験の内容はもちろん重要ですが、それ以上に大切なのは、「なぜ教員になりたいのか」をしっかりと自分の中で考えることです。心構えや精神的な強さも求められます。途中で壁にぶつかることがあったとしても、それを乗り越えることで、さらに成長できると信じてください。試験が終わった後にも、教育現場で直面する挑戦は続きますが、それらもすべて学びの一環で、学べる難しさ面白さを感じています。どんな形であれ、教育の世界に足を踏み入れて、夢が叶うことを応援しています。





小学校実習体験報告

教育・心理学部 子ども発達学科 学校教育専修3年 後藤寧公

私が教育実習を通して学んだ事は、学級経営の大切さ、授業の工夫、である。私の実習先では、不登校、貧困など、個人的、家庭的に問題を抱える子どもが多く、学内でも、生活環境が異なる子どもがいる様子が印象的であった。そうした中でどのように子どもたちの学校生活を充実させられるのか、担任の学級経営がとても大切になってくると感じた。

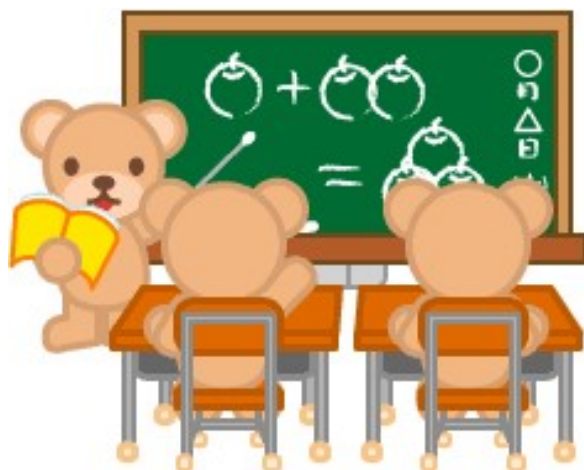
実習先では家庭的に問題を抱えている子どもたちが、安心して生活を送れるようにするために、学級経営の中でグループ活動を多く取り入れ、日ごろからグループ作り、そのグループを中心に生活を送っている。そのおかげで、生活の中の悩みや、細かい悩みなどを身近に相談できる環境が作られていた。学級経営は、生活だけでなく、授業でも生かされていた。グループを日ごろから取り入れているため、授業のグループ活動では全員が参加し、意見交流が活発に行われていた。

授業では単に知識を伝えるのではなく、子どもが理解しやすい説明をしたり、興味を持てるようにしたりすることが大切であると感じた。実際に授業してみると子どもの反応が思ったものと違ったり、思ったよりも授業が進まなかったりすることもあった。そうした経験を通じて、教師は柔軟な対応力が求められるようになるようになった。また、授業後の子どものノートを参考に自分の授業を見つめ直し、改善していく姿勢がとても大切であると思った。

実習で経験した事には、教師の仕事量の多さも含まれる。近年、教師の多忙化というワードを多く耳にしているため、ある程度自分の中で忙しさをイメージしていたが、想像よりも過酷な問題であった。教師は生徒が帰った後も、翌日の授業の準備や、行事ごとの準備など多く仕事があり、給食を食べる時間や休み時間も惜しんで、宿題の点検など自分の仕事を行っていた。また、家庭に問題を抱えている子どもは学校生活にも悩みを抱えていることが多いようだった。子どもたちの相談を受けることや、スクールソーシャルワーカーやスクールカウンセラーと話をしなければならないことも多々あった。

実習を経験して辛いことも多くあったが、早く一人前の教師になりたいという思いが強くなった。現場がかなり過酷で教師になった際に、続けられるか不安に思う日もあったが、子どもたちを通してこんなにやりがいを感じられる仕事は教師しかないと感じ、自分も子どもたちの支えになりたい、助けたいという思いが強くなった。

沖縄は貧困が全国的にも1番多く、子どもたちも学習に取り組む環境や安心して生活できる環境が整えられていないため、学びたくても学べない子どもも多くいる。まずは自分自身の専門性を高め、子どもに適切な教育を行える教師になることを目標に、いずれは、このような環境を変えていけるような大人になりたいと思った。





障害児教育実習体験記

教育・心理学部 子ども発達学科 学校教育専修4年 首藤裕貴

私は、大分県の特別支援学校で2週間にわたり、知的障害小学部3年生のクラスで障害児教育実習を行いました。この実習期間は、始まる前に想像していた以上に毎日が楽しく、時間があっという間に過ぎた2週間でした。子どもたちとの関わりや、現場の先生方の姿を間近で見て、特別支援教育の魅力を改めて実感する貴重な経験となりました。

教育実習中、何度か授業を担当させていただきましたが、授業を通して、子どもの反応を見ながら授業を進めていくことの重要性を学びました。授業を行うにあたって、事前に指導案を作成し、細かく計画を立てて準備を進めていきました。しかし、実習当初は、「指導案通りに進めなければならない」という思いにとらわれてしまい、子どもの反応を十分に考慮できない場面がありました。その際、指導教員の先生から、「指導案はあくまで計画であり、授業が始まれば指導案ではなく子どもの反応を見ながら授業を進めていくことが大切」というアドバイスをいただきました。このアドバイスを受けて、今までの自分の視点を変えることができましたが、実際に子どもの反応を見ながら授業を進めていくということは簡単なことではありませんでした。子どもは毎日異なる様子を見せ、気分や集中力にも変化があります。その変化に合わせて柔軟に対応し、一人ひとりに合わせた最適な指導を行うことの難しさを痛感しました。

また、授業づくりにおいて、子どもが「楽しい」と感じる瞬間を意図的に作ることの重要性も学びました。授業を行う中で、せっかく準備したにもかかわらず、子どもが全く授業に興味を示してくれなかった場面を経験したときは悔しい気持ちになりました。しかし、その原因は私自身の授業内容にあり、子どもにとって刺激的で楽しいと思える要素が足りなかったのだと気づくことができました。特別支援学校では、教師がいかに子どもの興味を引き出し、興味を持続させられるかが、授業の鍵だと感じました。子どもが興味を示したときには、主体的に参加しており、高い集中力を発揮しますが、興味がわからない場合には離席や他の行動が見られることがありました。そのため、教師が教材や教具を工夫し、子どもが夢中になれる仕掛けを準備することが必要だと感じました。現場の先生方の、子どもの反応を観察しながら授業内容を調整し、日々試行錯誤している姿が印象的でした。子どもの反応が教師への評価そのものであることを実感し、教師としての責任の重さを感じました。

さらに、特別支援学校では、教師同士の連携の重要性も実感しました。実習中は、授業の中心となるT1だけでなく、T1をサポートするT2として、授業に参加する機会も多くありました。T2は、T1の指導方針や計画を事前に把握し、授業中に臨機応変にサポートすることが求められます。T2の働き次第で授業の質が大きく変わるなど実感しました。特別支援教育においては、複数担任制を採用していることが多いため、教師同士の信頼関係やチームワークが、子どもたちへの質の高い支援につながると感じました。

2週間の教育実習は、毎日が新しい学びの連続で、自分自身の成長を実感できる非常に充実した時間でした。大学では学ぶことのできない、現場ならではの経験を通じて、特別支援教育の魅力を肌で感じ、「特別支援教育は教育の原点」ということを改めて実感しました。私は、4月から特別支援教育とは異なる道に進む予定ですが、この実習で得た学びや経験を大切に、いつかまた特別支援教育に関わる機会を持ちたいと思っています。





教職インターンシップ I で学んだこと

教育・心理学部 子ども発達学科 学校教育専修2年 藤田華月

2年生に進級して4月から12月までの約8ヶ月間、教職インターンシップ I に取り組んだ。大学に入学してから、初めての現場実践でインターンシップ先の小学校に行ったときは、不安と期待で胸がいっぱいだった。やはり、実際に自分の目で見る現場でのできごとは、学びになるものばかりだった。ここからは、インターンシップ先で学んだことをまとめていきたいと思う。

インターンシップ先では、1年生から6年生までの通常学級と特別支援学級を週ごとに回らせて頂いた。そんな中で学んだことは、各学年やクラスの雰囲気によって先生方が児童への声がけや、喧嘩などのトラブルが起こったときの指導方法を工夫していた点である。

一番初めに担当させてもらったのが、1年生のクラスで、人数は少なかったが、とても活発な児童が多いクラスだった。先生が児童に一斉に伝えたいことがあるときは、まず初めに「伝えたいことがあるからしっかり聞いて欲しい」ということを明確にし、児童の注意を引いている場面が見られた。さらに、その後の伝え方も、しっかり伝わるようにわかりやすい言葉で簡単に説明していたり、説明し終わったあとに見返すことができるように黒板に板書していたりと、至る所に1年生にしっかりと伝わるような工夫がみられた。また、1年生同士の言い争いが起きてしまったときも、興奮して言いたい放題になっていた児童たちに対して、どういう状況を優しくわかりやすく伝えることで、児童も冷静になることができ、仲直りすることができていた。

その次の週に、6年生のクラスを担当したが、1年生のクラスとはだいぶ違い、とても落ち着いた雰囲気を感じた。そんな中で、6年生の児童たちは、先生からの指示に対する反応や授業中の反応があまりなかったため、6年生の担任の先生は、話の終わりに反応を求めたり、授業中の児童同士での交流を促したりするような指導をしていたのではないかと考えた。言い争いが起きたときも、先生はあまり介入せずに児童の間で話をするように見守る立場に回っていたと感じた。児童の様子をしっかり把握しながら声掛けや指導を行うことが重要であることを学んだ。

特別支援学級のクラスを担当させていただいたときには、1人の男児が、掃除の時間に思い通りにいかず、箒を振り回したり、床に寝転がって大声をあげていたりしたことがあった。そのときに、特別支援学級の担任の先生が、「何が嫌でどうしたいのかをしっかりと言葉にしないと分からない」ということを暴れる男児に向かって何度も繰り返して、男児がそのうちに段々と嫌だったことや本当はこうしかったことなどを話し始めて、その後は元気な様子で授業に参加している様子がみられた。そのような場面から、講義で学んだ知識だけでなく、実際の現場から得る経験の重要性を感じた。これから、教育実習があるため、今回、インターンシップを通して学んだことや感じたこと、深めていきたいと思ったことを活かしていきたい。

